

4

被膜児伝説にみる胎盤の概念

内野 花

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

1849年から1850年にかけて掲載されたC.ディケンズの長編小説 *David Copperfield* の冒頭部分には、主人公が被膜児で誕生し、その羊膜をたった15ギニーで売買する旨が新聞で広告されたこと、羊膜が水難除けの御守りとしてひとつの間で信仰されていたことなどが記されており、イギリス・ヴィクトリア朝における民間での被膜児伝説および信仰の地位を示すものとして知られている。

“I was born with a caul, which was advertised for sale, in the newspapers, at the low price of fifteen guineas. Whether sea-going people were short of money about that time, or were short of faith and preferred cork jackets, I don't know; all I know is, that there was but one solitary bidding, and that was from an attorney connected with the bill-broking business, who offered two pounds in cash, and the balance in sherry, but declined to be guaranteed from drowning on any higher bargain.”

(*David Copperfield* by C. Dickens, 1850)

被膜児 (a child born with a caul) とは、通常分娩とは異なり、破膜することなく、もしくは破膜したものの羊膜の一部または全部が身体に付着した状態で娩出された児のことで、古来、医書のみならず文学作品や民話など、世界中でその姿が描かれてきた。その誕生の確率も、数万人に1人という稀なものであるためか、地域によってその概念はさまざまであった。被膜児は、ドイツでは幸帽児 (Kind mit der Glückshaube)、イタリアでは「シャツを着て生まれ (nati con la camicia)」た子どもと呼ばれ、幸福のシンボルでもあり、イギリスではその羊膜が水夫たちの御守りや水難除けの護符として珍重され、また、悪魔から身を守るために羊膜を焼却、保存、または再生の儀式に利用する地域・民族もあった。日本では、再生のシンボル、または「異常」出生児として被膜児を両側面から捉えられてきた。

被膜児伝説が語り継がれてきた地域・民族には、それぞれの伝統医学において、胎盤をはじめ胎児付属物すべてを薬として利用してきた歴史がある。また、当然のことながら、医学や技術およびその発展が、それぞれの社会文化における被膜児伝説の内容にも影響を与えてきた。本発表では、被膜児伝説のなかでの胎盤および胎児付属物の描写から、羊膜や胎盤がどのように捉えられていたのか、医書中の処方や薬能と比較検討する。